

トロント「ケアリングデモクラシー」の理論と  
大石「ケアリングコミュニティ」の理論の接合の試み  
—社会福祉のより精緻なメタ理論構築に向けて—

○ 東北福祉大学 氏名 大石剛史 (008312)

キーワード3つ：ケアリングデモクラシー、ケアリングコミュニティ、福祉のメタ理論

## 1. 研究目的

報告書は拙著『ケアリングコミュニティの理論』（2024）において、社会福祉・地域福祉の包摂的なメタ理論として「ケアリングコミュニティ」概念を検討した。しかし、本報告で取り上げるアメリカのフェミニズム政治学者トロントの「ケアリングデモクラシー」の理論については、拙著で取り上げることが出来ていなかった。トロントが提唱したケアリングデモクラシーの理論は政治学的の分野にケアの倫理やケアリングの理論を持ち込んだことに意義があると考え、ケアリングコミュニティの理論は政策としての社会福祉のあり方や、民主主義的な社会福祉の運営のあり方までも包括する理論であり、ケアリングデモクラシーの理論はケアリングコミュニティの理論の、よりマクロな領域と近接する理論であると考えられる。本報告ではトロントのケアリングデモクラシーの理論を概括したうえで、ケアリングコミュニティの理論との概念上の共通点と相違点を指摘し、社会福祉のメタ理論のより精緻な検討のために、この2の理論の接合可能性について試みに論じることを目的とする。

## 2. 研究の視点および方法

本研究ではトロントのケアリングデモクラシーと大石のケアリングコミュニティの理論を概念上の背景になっている思想や哲学的基盤等から比較検討し、両理論の共通点と相違点を明らかにするとともに、理論上の接合可能性について考察する。

## 3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の倫理規定に則り、特に文献研究である本研究においては、自説、他説の区分を明確にし、引用、参照した箇所を明記する。なお、演題発表に関連し、標記すべきCOI関係はない。

## 4. 研究結果

ケアリングデモクラシーの理論とケアリングコミュニティの理論を理論の主な基盤、ケア・ケアリングの位置づけ、正義の倫理とケアの倫理の関係、公共性についての捉え方、社会問題へのアプローチの特徴などから比較し、共通点と相違点を検討した。

共通点は、理論の主な基盤として「ケアの倫理」を採用している点、ケア・ケアリングを人間存在の本質として位置づける点、ケアを公共のものとして位置づけようとする志向性、新自由主義的・効率主義的な現代社会のケアの偏在を批判する視点などが挙げられた。

相違点としては、理論の主な基盤として大石が存在論的現象学を採用するのに対し、トロントはフェミニズムの批判理論を採用する点、ケア・ケアリングの位置づけとして、大石は親密圏によるケアリングを本質とし、トロントはケアの倫理をよりマクロな政治的実践・責任に適用する点などがあげられる。

## 5. 考察

トロントはフェミニズムの立場から、「ケア」についての批判的視点を踏まえたケアリングデモクラシーの理論を提示した。「ケア」は個人的な行為や私的な領域のみに適用されるだけでなく、人間は元々生涯にわたりケアを必要とする相互依存的な存在であり、ケアは民主主義社会の根幹になっていると捉える。

トロントは『モラル・バウンダリー』（1993）で検討したケアの4段階のプロセス、①関心を向けること(Caring about)、②配慮すること(Caring for)、③ケアを与えること(Care giving)、④ケアを受け取ること(Care receiving)に加え、『ケアリング・デモクラシー』（2013）では⑤共にケアすること(Caring with)を追加した。トロントはこの5つ目の段階について「(前略)ケアニーズおよびそれが満たされる方法が、すべての者にとっての正義、平等、自由に対する民主的なコミットメントと一致している必要がある」と述べている。トロントはケア責任の民主主義的な分配を一ケアを私的領域から公的領域の中心的課題とすることによって一よりマクロな政治的課題とすることを重視している。

大石のケアリングコミュニティの理論（2024）では、コミュニティでの熟議を通じたケア責任の分配と、私的なケアを補うシステム構築を民主主義的に行う議論を行った。この点はトロントの議論と相通ずる部分である。またトロントが示したケアの5段階のプロセスは、①関心を向ける＝アウトリーチ、②配慮する＝コミュニティ内でのケア意識の醸成（福祉教育的実践）、③ケアを与えること＝地域福祉による直接サービス実践、④ケアを受け取ること＝実践の評価とフィードバック、⑤共にケアすること＝ケアリングコミュニティの形成と、ケアリングコミュニティの理論が示した実践的課題に対応する。

トロントと大石の相違は、理論の拠って立つ基盤がトロントはフェミニズム政治学、大石は存在論的現象学だということである。これにより理論の特徴がトロントにおいてはよりマクロ（主流派政治）に対する批判理論となり、大石においてはミクロからメゾ、マクロへと展開する実践的な規範理論となっている。

両者の理論に相違はあるが、ケア・ケアリング概念（ケアの倫理）を社会福祉のメタ理論として批判理論と規範理論として位置付ける意義は大きいと考える。

### <参考・引用文献>

ジョアン・C・トロント、岡野八代監訳（2024）『ケアリング・デモクラシー：市場、平等、正義』勁草書房、ジョアン・C・トロント、杉本竜也訳（2024）『モラル・バウンダリー：ケアの倫理と政治学』勁草書房、大石剛史（2024）『ケアリングコミュニティの理論：社会福祉の新しい地平を拓く地域福祉のメタ理論』学文社